



Title	永井荷風『墨東綺譚』論：大江の「墨東綺譚」を手がかりに
Author(s)	アブラル, バスィル
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2020, 54, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91374
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

永井荷風『濯東綺譚』論

— 大江の「濯東綺譚」を手がかりに —

アブラル・バシル

キーワード…語り／自己正当化／メタフィクション／「失踪」／花柳界

一、「わたくし」の語りと『濯東綺譚』の意義

『濯東綺譚』は一九三七年四月十六日から同年六月十六日まで東京・大阪「朝日新聞」の夕刊に掲載された。一九三七年八月に、新聞連載の時から話題となっていた木村莊八の挿絵を残し、本編の末尾に「作後贅言」¹⁾も添付され、最初の単行本（公刊）が出版される。以来、『濯東綺譚』は版を重ね、現在も広く読まれ続けている永井荷風の代表的な作品である。発表当時、三五回に渡る連載が様々な理由で途絶えることがあったにもかかわらず、『濯東綺譚』は多くの読者の注目を集め、評論者からも概ね好評を得ていた。とりわけ『濯東綺譚』の主人公大江匡（ひいては作者永井荷風自身）のヒューマニズムを読み込んだ佐藤春夫の同時代における評言が、戦後の荷風研究にまで影響を与え、多くの議論を引き起こした。

文学史の観点から言えば、従来の研究において本作は文藝復興期以降、『つゆのあとさき』（『中央公論』一九三二・一〇）や『ひかげの花』（『中央公論』一九三四・八）などの発表で、〈復活〉していた永井荷風の一連の創作活動の集大成として位置付けられてきた。⁽³⁾このような位置付けは、戦争によって途絶えられていくこととなる荷風の創作活動を時代状況の中で捉えている一面があることは否めない。他方『墨東綺譚』の文学史的な位置付けは、本作が内包している様々な問題点が永井荷風の他の作品と関連づけられて読まれてきたという従来の研究の姿勢も反映している。

『墨東綺譚』の主人公であり、語り手でもある「わたくし」こと大江匡の存在は、この流れの追い風となっていると言える。大江は作中、自分が執筆している「失踪」という作品を引用しているだけではなく、まさに「墨東綺譚」という小説を書いていることにも言及している。このようなメタフィクシオンの要素に加えて、大江は荷風が実際に交流していた文壇の作家たちを自分の知人友人として紹介することもあれば、テキスト中、他の荷風作品に言及することや部分的な本文の引用なども行っている。このような特徴から、大江匡が作者の〈分身〉として造型されていることは明らかである。それと同時に、『墨東綺譚』において導入されている複層的な語りの方法を分析することこそ、本作品の読解に欠かせない作業であるという事実も一目瞭然である。

この事実を鑑みて、戦後の『墨東綺譚』研究では「わたくし」の語りの相対化が早くから議論の対象となった。中でも、「わたくし」の言動を作者永井荷風の思想と比較対照しながら細かく詮議する試みが目立つ。自然に、このような試みは作品論の枠組みにとどまらず、作家論へと展開していったケースが少なくない。例えば、成瀬正勝は荷風の実生活における「やつし」の態度を、彼の文学全般に見られる「やつし」の態度と結びつけた。⁽⁴⁾平野謙は、前述した佐藤の評価を批判的に捉えた形で、『墨東綺譚』の語り手の態度について、私小説的手法の逆用という視座を提供し、大江匡（ひいては永井荷風）の偽善的な行動を責めた。宮城達郎は「わたくし」という一人称を「仮面」として⁽⁵⁾

捉えるべきだと主張し、その背後にある荷風の文学的姿勢を定義することに集中した。同じ延長線上に、坂上博一⁽⁷⁾は『澤東綺譚』における主人公と作者の「強引なまでに」近い設定を検証しながら、そうした設定から「変身のトリック」を見いだしながらも、大江の言動を荷風 of 思想と関連付けて解釈した。

他方、「わたくし」を中心とする『澤東綺譚』の語りが内包している諸問題について考察する時に、右のように作者永井荷風の実人生における体験や、彼の思想を強く意識した論考の傍、語り論の適応を試みた論考も行われてきた。中澤千磨夫⁽⁸⁾は、まず「わたくし」の語りを、「大江匡吉的「わたくし」と、「荷風散人的「わたくし」に分けてから、その両方の融合の意味を論じ、『澤東綺譚』に使われている「わたくし」という語り手に荷風の方法論の実験を見抜いた。劉建輝⁽⁹⁾は作中に確認できる「書かれる「わたくし」に対する書く「わたくし」という構図を指摘してから、『澤東綺譚』に導入されている「主人公を対象化している書き手の「わたくし」という荷風の方法論について、「おそらく荷風はこのすでに自分の入る余地のない現実社会を見つめながら、同時にまたそれを見つめている自分の姿をも発見した」と述べている。中澤論や劉建輝論はいずれも示唆に富んだものであるが、言わば「わたくし」の二面性を論じたこれらの論考で行われている「わたくし」の語りの分離は合理的ではないと言わざるを得ない。というのも、すでに金子明雄⁽¹⁰⁾が「自己の趣味を述べ、回想する（わたくし）をどちらに振り分けるべきか判断困難である」こと、「物語世界での行為の主体すら区別できなくなる」ことなど、右のような「わたくし」の語りの分離が引き起こす様々な論理の問題を指摘している。金子論はまた「『澤東綺譚』は、語ることの自意識が新たな物語を増殖させてしまうことも、水準の異なる語りがお互いの領域を侵犯してしまうことも無縁」だと主張している。

『澤東綺譚』における語りの方法論に注目する際、「わたくし」が語っている内容を二つ以上の違う〈語り手〉に属するものとして区別することは建設的ではないかもしれない。しかし大江に見られる語りへの自意識は、『澤東綺譚』

を読み解くために欠かせない重要な論点である。というのも、「澤東綺譚」の創作の行為それ自体は、大江による戦略的な行為であると考えることが出来るからである。これは近年の『澤東綺譚』論において提示されている視座である。例えば、多田蔵人は「澤東綺譚」の執筆によって「玉の井の体験を永遠のものとして止め」ようとする大江の狙いに言及している。辻堂遼平も同じく、「安息処」を「安息処」のまま残すために、「わたくし」は『澤東綺譚』を語るのである」と指摘し、大江による語りの行為が持つている意義を問う。一方で、従来の研究の中で、「わたくし」の語りの狙いを明らかにする論考では、物語のレベルで確認できる大江の語りの論理的な問題が指摘されているものの、そのような論理上の問題によって大江の言説を相対化させる試みは見当たらない。

大江は自作「澤東綺譚」の執筆によって何をしようとしていたのか、彼の創作の動機を見極めることは、『澤東綺譚』が大江匡の創作の行為それ自体をも対象化している作品であることを意味する。なお、これは必ずしも『澤東綺譚』独特の構図ではないことを特記しなければならない。〈物語〉を作り上げる主人公たちの有り様を捉える方法論は、『澤東綺譚』のように洗練されたものではないかもしれないが、他の作品において確認できる荷風小説の常套手段である。⁽¹³⁾ しかも多くの場合、〈物語〉の創造は主人公たちの乱暴な論理のもとで行われ、その背景にそれぞれの人物の欲望や願望を見極めることができる。本論では、「わたくし」の語りの中に含まれている論理的問題を見抜くことにより、「澤東綺譚」の創作によって〈花柳界〉通いの精神を合理化しようとする大江匡の願望に光を当てる。

二、「観察」の仕組みと大江のパフォーマンス

大江は白雪と離別することに至った経緯を叙述する際に、彼女を含む「彼女たち」に対する自分の思想的な立場も

含め、詳しい事情を述べている。これはお雪からの結婚の要望があつた「七」から小説の末尾にかけて断続的に行われているが、ここでひとまず大江のこの一連の記述で展開されている内容をまとめておく。大江は頻繁にお雪の家を訪れる背景に、隣のラジオのことから昔の思い出まで、色々な理由はあると言いつつ、「いずれも女に向つて語り得べき事ではない」と主張する。またそもそも自分が〈花柳界〉に向かつていった理由について、「正当な妻女の偽善的虚栄心、公明なる社会の詐欺的活動に対する義憤」などと旧作の一部を引用しながら、自らの正義観も力説している。このように自分の立場を明らかにした上で、大江はお雪の結婚の要望を、男の力によつて境遇を一変させたいものとして位置づける。そして、「お雪の後半生をして懶婦たらしめず、悍婦たらしめず、真に幸福なる家庭の人たらしめるものは、失敗の経験にのみ富んでゐるわたくしではな」と、彼女の要望に応えられない事情も言い立てる。結局大江は自分の社会的地位や、彼女の要望に応えられない本当の理由をお雪に説明できず、彼女と別れていく。

これまでの研究において、このような大江の行動や主張から、客と娼婦の枠を超えるような二人の関係に対する彼の「不安」⁽¹⁴⁾や「挫折」⁽¹⁵⁾などがたびたび汲み取られてきた。この類の見解において、大江はお雪をあくまでも過去の夢を思い出させるミューズとして位置付け、彼女から「玉の井」という書き割りでの「恋愛嬉戯」⁽¹⁶⁾以上の何ものをも期待していなかった事実が強調されている。しかし一方で、大江自らがお雪との離別に至る経緯を語る際に主張している事柄は概ね無視されていると言える。すなわち、大江自身は無言のままお雪との離別を決心した理由について、少なくとも表面上では、現在その境遇をさほど悲しんでいないお雪を悲しませるようなことをしたくないからだと説明しているのである。

「お雪が」性質は快活で、現在の境遇をも深く悲しんではゐない。むしろこの境遇から得た経験を資本にして、

どうか身の振方をつけやうと考えてゐるだけの元氣もあれば才智もあるらしい。(略)「お雪と別れる決意をしたのが」わたくしを庇ふのではない。お雪が自らその誤解を悟つた時、甚しく失望し、甚しく悲しみはしまいかといふことをわたくしは恐れてゐたからである。(略)まだ、今の中ならば、それほど深い悲しみと失望とお雪の胸に与えずとも済むであらう。

この半面、大江は自らの行動がお雪を騙すようなものであつたことを認めつつ、「わたくしはこの許され難ひ罪の詫びをしたいと心ではさう思ひながら、さうする事の出来ない事情を悲しんでゐる」とも述べている。従来、このようにお雪の悲しみのみならず、自分自身の悲しみにも言及している大江の言説は殆ど見落とされてきたと言つてよいだろう。しかしまさに二人の悲しみをめぐる右のような大江の主張こそ、彼のお雪に対する言説の論理的な問題を見抜くための手がかりを与えてくれる。それと同時に、二人の〈悲しみ〉をめぐる記述に注目することによって、お雪との離別がいかに戦略的に語られているのか、大江の「澤東綺譚」制作に関わる姿勢を見直すこともできる。

まずは、右に引用したお雪の悲しみをめぐる大江の主張の背景に、彼の周到な「観察」があると彼は述べているところに注目する必要がある。大江はその「観察」が決して間違つていないことを次のように力説している。

しかしここにわたくしの觀察の決して誤らざる事を断言し得る事がある。それはお雪の性質の如何にかかわらず、窓の外の人通りと、窓の内のお雪との間には、互いに融和すべき一縷の糸の繋がれてゐることである。(略)窓の外は大衆である。即ち世間である。窓の内は一個人である。そしてこの両者の間には著しく相反目してゐる何物もない。(略)わたくしは若い時から脂粉の巷に入り込み、今にその非を知らない。ある時は事情に捉はれ

て、彼女たちの望むがまま家に納れて箕帚を把らせたこともあつたが、しかしそれは皆失敗に終わつた。彼女たちは一たびその境遇を替え、その身を卑しいものではないと思ふやうになれば、一変して教ふべからず懶婦となるか、しからざれば制御しがたい悍婦になつてしまふからであつた。

「墨東綺譚」において大江はこのような「観察」のもとで、再三にわたりお雪の悲しみを否定していくが、ここに二つの論理上の問題点がある。一つ目の問題は、大江の「観察」が、お雪の有様だけを反映したものとは限らないという点である。そもそも大江が作り上げたお雪像とは、「銀座の女給」との対比において「正直とも醇朴とも言へる」、「窓の女」の一人といったもので、お雪その人の何らかの特徴がそのイメージの背景にあるわけではない。⁽¹⁷⁾ 右の本文引用の後半部分では、大江の話の対象がお雪から、「彼女たち」にすり替わっており、「わたくし」がお雪をその普遍的な「彼女たち」の一人としか見ていないことも明らかだろう。つまり大江は、お雪を「彼女たち」という既成の枠に嵌めているだけなのである。

二つ目の問題は、大江の「観察」とはあくまでも限定的なものでしかないということである。これはお雪の「悲しみ」に関しての叙述が展開されている、「七」の「おかみさんにしてくれない」場面に注目することで見えてくる。以下この場面のやり取りを引用しているが、特に後半の部分において、お雪はこの時「いつものよう」ではない自分の顔を大江から隠していることが見て取れる。

お雪は座布団を取つて窓の敷居に載せ、その上に腰をかけて、暫く空の方を見てゐたが、「ねえ、あなた」と突然わたくしの手を握り、「わたし、借金を返しちまつたら。あなた、おかみさんにしてくれない。」(略) お雪は

何とも言はず路地のはずれ聞こえ出したヴィヨロンの唄につれて、鼻唄をうたひかけたので、わたくしは見るともなく顔を見やうとすると、お雪はそれを避けるやうに急に立ち上がり、片手を伸ばして柱につかまり、乗り出すやうに半身を外突出した。(略) こなたへ振り向いたお雪の顔を見上げると、いつものように片鬘を寄せてゐるので、わたくしは何とも知れず安心したやうな心持になつて、(略)

右の場面続き、自らの花街通いの根底にある発想など己の思想史に関する記述を差し挟んだ上で、大江の語りは改めてお雪の様子について言及している。その場面でも「その夜にかぎって、いかにも無理に寄せた鬘のやうに、言ひ知れず淋しく見えた」と記述され、お雪の異常な様子が伺える。しかし数日後、お雪のところを訪ねた時に、大江はお雪とその境遇の「融和」を見抜いた自身の「観察」のもとで、ひたすら彼女の悲しみを否定していくこととなり、「七」で描かれているお雪の異常の様子は再び言及されることはない。要するに、この場面で示された「淋しいお雪の有様は、日常的な彼女の姿を基にして作り上げられた「現在の境涯をも深く悲しんではゐない」とする大江の「観察」には全く反映されていないのである。

注意すべきことは、このやうにお雪の悲しみが否定されていくことは裏腹に、「墨東綺譚」において、徐々に大江自身の悲しみが前景化されていくことである。「悲しみ」という語に注目して本文を辿り直すと、お雪の悲しみから、大江の悲しみへと変遷していく語りの流れを確認することができる。

・「お雪は」性質は快活で、現在の境涯をも深く悲しんではゐない。

わたくしは既に、お雪の性質を記述した時、快活な女であるともい、またその境涯をさほど悲しんでもゐな

いと言った。

・お雪が快活の女で、その境涯をさほど悲しんでゐないやうに見えたのが、(略)

・これはわたくしを庇ふのではない。お雪が自らその誤解を悟つた時、甚しく失望し、甚しく悲しみはしまいか
ということをやわたくしは恐れてゐたからである。

・わたくしは、この許され難い罪の詫びをしたいとさう思ひながら、さうすることのできない事情を悲しんでゐる。

・まだ、今の中ならば、それほど深い悲しみと失望とをお雪の胸に与えずとも済むであらう。(中略) もしこれを越したなら、取り返しのつかない悲しみを見なければなるまいといふやうな心持が、夜の更けかけるにつれて、わけもなく激しくなつて来る。

更に視野を広めていうと、「悲しみ」という言葉では書かれていないが、例えば最後にお雪の家を訪ねた時に、彼女が病気で入院していると知らされ、わざわざ「病むとも死ぬやうなことはあるまい」ともったいぶった言い方をして、「別れてしまへば生涯相逢うべき機会も手段もない」と運命を嘆くような記述からも、同様の旨が見て取れる。⁽¹⁸⁾従来、大江自身が二人の關係の破綻で感受する悲しみに関する記述から、大江の被害者としての姿を見出す指摘も見られる。⁽¹⁹⁾しかしここまで論じてきたように、大江によって展開されるこの一連の主張は、いずれも根拠を欠いている、あるいは乱暴な論理によつて成り立つたものであると言わざるを得ない。この点に鑑みれば、大江自身の悲しみに関する記述について、彼の実態を反映したものというよりも、むしろ〈別離を悲しんでいる〉というポーズを示すことに重きを置いたものとして捉えるべきである。即ち、お雪の悲しみから自身の悲しみへと遷移してゆく大江の言

説は、それぞれの主張の是非はともかくとして、最初から「事実」を興味の対象としていないと言える。

特記しなければならぬことは、二人の〈悲しみ〉に関する記述に限らず、乱暴な論理に基づく大江の語り方は作中の所々で表出している点である。例えば大江はお雪との出会いの場面を好意的に捉えているが、雨の中の客引きは娼婦の常套手段であり、必ずしも大江の言うような伝統的な美意識を連想させるものではない。⁽²⁰⁾これと同じように、お雪に「おかみさんにしてくれない」と言われ、彼女からの意外な愛情を感じたと述べている大江だが、うがった見方をすれば、これもお雪が娼婦として提供した一種のサービスだったかもしれない。⁽²¹⁾

前述したように、このような論理の欠点からは、「澤東綺譚」創作の背景にある大江の目論見が見てとれる。「澤東綺譚」において、大江匡は自身の旧作の一節を引用し、自分の〈花柳界〉通いの背景にある思想について、「正当な妻女の偽善的虚栄心、公明な社会の詐欺的活動に対する義憤は、彼をして最初から不正暗黒として知られた他の一方に馳せ赴かした唯一の力であつた」と述べている。一方で、彼はこのような自分の思想に基づく〈花柳界〉通いが誤解を招く可能性があることも意識している。以下引用しているように、大江は自分が「彼女たち」を見下していることをわざわざ否認しているところから、彼のこのような自己認識が読み取れる。

わたくしは彼女たちと懇意なるには――少なくとも彼女たちから敬して遠ざけられないためには、現在の身分は隠してゐる方がよいと思つた。彼女たちから、こんな処へ来ずともよい身分の人だのに、と思はれるのは、わたくしに取つてはいかにも辛い。彼女たちの薄倖な生活を芝居でも見るやうに、上から見下ろしてよろこぶのだと誤解せられるやうな事は、出来得るかぎりこれを避けたいと思つた。それには身分を秘するより外はない。

しかしやはりここでも大江の乱暴な論理が目につく。「身分を秘する」という、まさに「詐欺的」な大江の窮策は、「彼女たち」と懇意になるための方法とされているが、これはむしろ大江と《花柳界》との間にある断絶を窺わせるものであると考えられる。⁽²³⁾ 他方、己の身分を明かしてしまえば、《花柳界》に通う大江の行爲は、「彼女たちの薄倖な生活を芝居でも見るやうに、上から見下ろしてよろこぶ」、「偽善的」なものとして誤解される恐れがある。これは「十年一日の如く花柳界に出入」しつづけてきた大江の論理が逢着する宿命的なパラドックスである。

大江はこの論理の欠陥を、お雪との出会いを描いた「澤東綺譚」において乗り越えようとしている。その過程で絶対に欠かすことができない要素こそ、自らの境遇を悲しんでいないというお雪の人物造型にはかならない。具体的にいえば、大江はお雪の「寂し」さを見た光景を異化したうえで、逆に平常の彼女とその境遇との「融和」を見抜いたという自身の観察を弁護している。そうすることによって、大江はあの夜の場面ですらにお雪の「薄幸な生活」を認めていながらも、それを救おうとしない自分の偽善的な行動に悩まされることがない。むしろ《悲しくないお雪》に對する《悲しむ自分》という設定こそ、大江にお雪との離別について「これはわたくしを庇ふのではない。お雪が自らその誤解を悟つた時、甚しく失望し、甚しく悲しみはしまいかといふことをわたくしは恐れてゐたからである。」と、己の行動を正当化して見せる枠組みも与えてくれている。

このように見れば、お雪の悲しみの否定から始まる大江の言説において、彼は恣意的で且つ限定的な「観察」のもとで、お雪の悲しみを否定する反面、彼女を悲しませるようなことを避けるために、自分の悲しみを飲み込んで、無言のまま別れていくより仕方がなかった、という風に自らの行動を正当化していると考えられる。彼のかような試みは、お雪との関係の枠を遥かに超え、大江が一生続いて来た自らの花街通いの心理をも合理化できる枠組みを獲得していくこととなる。この過程において、お雪の実態や自らの主張の妥当性は後回しにされていることを考慮すれば、

「澤東綺譚」という大江の小説が、自らをはじめとする「澤東綺譚」の読み手を感化し説得することを目論んだ彼の言語的なパフォーマンスであることが見えてくる。

三、「澤東綺譚」における〈金力〉と花柳界の造形

大江が作り上げている「澤東綺譚」という物語の中に姿をあらわしている彼のパフォーマンスに光を当てると、いわば永井荷風の「澤東綺譚」という小説は大江の試みそれ自体を対象としている作品であることが見えてくる。創作の過程で、大江は自らとお雪の出会いの経緯を「潤色せずに」書いたと言い、また両者の離別を描くに及んで「小説的色彩」の採用を遠慮したいとも述べている。しかしここまで論じてきた通り、これらの記述が浮き彫りにするのは、文字面とはむしろ真逆の実態、すなわち自らの正当化を図っている大江匡の姿に他ならない。前に紹介した多田論の指摘を借りて言えば、大江が永遠のものとして留めたいものは、お雪との出会いや別れの〈体験〉、あるいは玉の井の〈実態〉ではなく、むしろそれらの事柄を恣意的に解釈した自分自身の正当性だったと解釈できる。

一方で、このように「何の作意もない」とか「誇張に陥り」たくないかいった記述の背後に大江のパフォーマンスがあったとすれば、当然それらの記述を相対化させることによって浮かび上がる物語にも目を配る必要がある。そこで一つの重要な鍵となるものは、「澤東綺譚」の作中作「失踪」である。「澤東綺譚」のプロットに鑑みたら「失踪」からの二度目の引用は決定的な位置にある。すなわち、お雪に「おかみさんにしてくれない」と結婚話を持ち掛けられた日の夜、自宅に戻った大江は、執筆が停滞していた「失踪」の末節を読み返しているわけであるから、その前後の大江のお雪に対する言説の展開もこの引用文と密接に関係していると見るのが自然であろう。

改めて「失踪」のあらすじとともに、「墨東綺譚」での二度目の引用の流れを確認しておこう。己の家庭生活に不満を覚えていた種田は、退職金を手にしたまま、妻子を残し言わば男の家出をする。種田は元々女中として雇っていたすみ子に会う。現在カフェの女給になっているすみ子は種田からその〈失踪〉の話を告白された後、彼を自分の部屋に招待し、二人は一夜を共に明かす。そのとき、「手軽く情交を結」んだ後、すみ子が種田におでん屋を経営したい相談を持ち掛けているのである。「失踪」の本文からの引用がなされる直前に、大江は自らがお雪から意外な情愛を受けたことを振り返り、種田とすみ子の情交も不自然ではないので「作者が都合の好いやうに作り出した脚色として折けるにも及ばない」などと訴える。一方で、実際に引用されている「失踪」の本文において、種田とすみ子は殆ど〈金〉の話ばかりをしている。更に、長い「…」で終わっている「失踪」からの引用文に続き、「墨東綺譚」の「九」において、大江は再びお雪の家を訪れ、彼女は自分と結婚することで、「懶婦」か「悍婦」になりたがっているなどと持論を展開していく。

無論このようなプロットの設定は戦略的なものである。すでに指摘されている通り、「お雪の「ハス」の願望は、『失踪』のすみ子が計画する「おでん屋」と等価⁽²⁴⁾であると考えられる。つまり、すみ子は種田が退職金を手にしてから男の家出をしたことを聞いた後、その種田の力を借りて自らの境遇を変えようとしている、⁽²⁵⁾というのが大江の認識であって、大江は同じ認識のもとでお雪の結婚の要望を〈男の力によって境遇を変えたい〉ものとして位置付けているのだと言える。このように見ると、ちょうど結婚話を持ちかけられた後に引用がなされているプロット上の工夫が明らかであり、大江が後置的な立場から「失踪」を自らの言説の土台として利用していることもうなずける。しかし、お雪の〈悲しみ〉をめぐる大江の主張がそうであったように、果たしてお雪の結婚の要望をすみ子のおでん屋の計画と同等なものとして扱う大江の認識は妥当かどうか疑問が残る。なぜなら、大江自身によれば、お雪は彼の社会

的な立場を同じ日陰に暮らす者として「誤認」⁽²⁶⁾しており、大江になんら特別な金力を認識していた証拠も見当たらないからである。

作中度々繰り返されている大江の乱暴な論理や、恣意的な物事の解釈が一貫して示しているものは、大江自身の〈金力〉に対する認識から生まれる一種の階級意識ではないだろうか。「澤東綺譚」において、冒頭からこのような大江の認識を見て取ることができる。世間離れた生活を送っている「わたくし」は、警察の尋問を受けた後、交番の外に高級な外国タバコを吸い出し「薫だけでもかひで置けと云はぬばかり、烟を交番の中へ吹き散」す、「二」の最後の場面において、大江はすでに自らのそうした考え方を垣間見せている。続く「二」において、大江は「失踪」のあらずしをまとめているが、そこで妻を亡くした後、「光子母子の金にふと心が迷つて再婚」していく種田の成れの果てが描かれていると同時に、とある政治家に「欺かれ」て子を生んだ後、「毎月五十円」の子供の教育費と、結婚した場合の「相当の持参金」によつて、その沈黙が〈買われている〉光子の有様も描写されている。お雪にまつわる一連の物語を振り返れば、二人の雨の中の「伝統的」で「お誂ひ通り」であつた出会い、実際に「五十銭」と値がつけられて始まっていることがわかる。まさに〈金〉の上で成立した〈娼婦と客〉という関係の枠組みは、実際に相手の社会的な地位を誤認しているようであるお雪からの結婚の要望によつて崩壊する直前までに進む。しかし大江はお雪の要望を聞いた直後に、すみ子が種田の退職金を目当てに彼と「手軽に情交を結ぶ」経緯を自作から引用し、お雪の行動も同じようなものだと暗に示しながら、二人の関係を元の枠に戻そうとする。そして、「秋裕の代」として「三十円」を払つて、お雪の悲しみを無視する半面、「お雪が意外のよろこびに目を見張つた其顔を、永く忘れないやうにじつと見つめ」ることのみに満足する。最後にお雪の家を尋ねた時に、「いつものやうに、下の茶の間」ではなく、二回に案内されたことや、「馴染みの客」が来たことで「半時間とはたたぬ中戸口を出た」ことなどをもつとも

らしく語っている件に、大江は「三十円」の手切れ金を払ったことで、お雪を悲しませることを避けながら、「伝統的」で「お誂い通り」にお雪と別れたという認識を強調しているとも言える。

このように大江は〈金〉への欲望で動かされている種田、すみ子、そしてお雪といった人物たちの言動から材料を採し出して、お雪との離別を決めた自分の行動を合理化しながらも、その背景にある思想の妥当性を訴えているのである。大江はお雪もその一人である日陰の世界に住む「彼女たち」と、自らの欲するような関係を作り上げるために、自分を隠すより仕方がないと言っている。そこで彼は、お雪との体験を対象にしながら、「溼東綺譚」の執筆で己の行動の宿命的な論理の欠陥を乱暴にでも合理化しようとする。ただし、自分と「彼女たち」との間にある乗り越えられない壁を「失敗の経験にのみ富んでゐる」我が人生で熟知している大江は、実際に「懇意」になれたお雪との関係を断ち切るより仕方がないのであった。言い換えれば、「溼東綺譚」は大江が掲げている〈花柳界〉通いの思想の合理化を目的としたものであるかもしれないが、その試みを相対化することによって見えてくるものは、大江の狙いと正反対の側面、即ちそのような思想が孕んでいる根本的な論理の矛盾に他ならない。

大江匡は「公明な社会」と二項対立をなしている「他の一方」、つまり〈花柳界〉に向かっていった己の選択の理由として、歪んだ正義論を提示している。彼は「詐欺的」で「偽善的」である社会に居場所をなくし、〈花柳界〉に赴いていったというが、嫌悪すべきその「公明な社会」における自らの階級意識が原因で、お雪との関係においてまさに「偽善的」で「詐欺的」なことしかなし得なかった。大江が実際に〈花柳界〉に求めているものは、自らの〈金力〉で操作できる「幻影」ではないのである。その際に、すでに「不正暗黒」に満ちている〈花柳界〉であればこそ、お雪ら「彼女たち」の「薄幸な生活」を目の当たりにしても、何ら良心の呵責を感じることなく過去の幻影に浸ることが可能である。己の行動の合理化やその主張の正当化を、〈物語〉を生み出すことによって遂行する人物たち

の有様が他にも多くの荷風小説のモチーフとなっているように、『澤東綺譚』も大江匡が「澤東綺譚」という物語を作り上げることによって自らの〈花柳界〉通いの思想を合理化しようとすることを対象としている作品だと言える。

〔注〕

- (1) 「作後贅言」は新聞紙上に掲載されたものではなく、はじめ一九三七年一月の「中央公論」で、「万茶亭の夕」というタイトルで発表された。
- (2) 佐藤春夫「荷風先生の文学―その代表的名作『澤東綺譚』を読む」(『東京朝日新聞』一九三七・七・一四―一六)、同「澤東綺譚を読む」(『文芸』一九三七・八)
- (3) 嶋田直哉「テクストを読むこと…永井荷風『澤東綺譚』研究史を考える」(『明治大学教養論集』二〇一七・九)
- (4) 成瀬正勝「荷風と「やつし」」(『明治大正文学研究』第一〇号、一九五三・五)
- (5) 平野謙「永井荷風『澤東綺譚』」(『岩波講座 文学の創造と鑑賞』第一卷、岩波書店 一九五四・一一)
- (6) 宮城達郎「澤東綺譚」の含む諸問題」(『国語と国文学』一九五五・一二)
- (7) 坂上博一「澤東綺譚」論(『宮城達郎編『永井荷風の文学』所収 桜楓社、一九七三・五)
- (8) 中澤千磨夫「澤東綺譚」序論、装置としての大江匡―(異徒、第五号、一九八三年四月)
- (9) 劉建輝「澤東綺譚」論―内包された二人の「わたくし」を手掛かりに―(『国文学研究ノート』一九八八・八)
- (10) 金子明雄「一人の「わたくし」・複数の「わたくし」―『澤東綺譚』の領域」(『日本近代文学』一九九三・五)
- (11) 多田蔵人「永井荷風『澤東綺譚』論」(『国語と国文学』二〇一〇・三)
- (12) 辻堂遼平「失われた若さのために―永井荷風『澤東綺譚』論」(『近代文学第二次研究と資料』二〇一八・三)
- (13) これは『新橋夜話』(柗山書店、一九二二・一一)に収録されている諸編から『ひかげの花』まで幅広く利用されている方法論であるが、詳細について拙論を参照されたい。

- (14) 中澤千磨夫、前掲論文。
- (15) 松田良一『『溼東綺譚』論—ラヂオと蚊の音—』(『相山国文学』一二、一九八八)
- (16) 松田良一、前掲論文。
- (17) お雪の若さ、顔立ちの良さ、皮膚の白さ、髪型、着物のパターンなどは、あくまでも彼女の外見を形容した、いかにもジェネリックな娼婦像に過ぎないのである。特に大江が気に入っているお雪の古風な身なりでさえ、玉の井の娼婦としては珍しいものの、お雪にのみ見られる特徴ではない。これら大江の観察に関して、お雪の描かれ方よりも、そのような観察それ自体のあり方を、より重点的に分析する必要があるだろう。
- (18) すでに、鹿島惇「むかし」と「現在」の仮像—永井荷風『溼東綺譚』論—(『近代文学第二次研究と資料』二〇一八・三)が指摘しているように、このような大江の発言には特に根拠がなく、あくまでも「小説的な色彩」に過ぎないのである。
- (19) 坂上博一(前掲論文)↓「第十章の「わたくし」の悲歎を見れば、「わたくし」もまた一種の被害者に他ならないのである。」
- (20) 松田良一、前掲論文。
- (21) 多田蔵人、前掲論文。
- (22) 本来は永井荷風『見果てぬ夢』(『中央公論』、一九一〇・一)からの引用である。
- (23) 坂上博一(前掲論文)↓「ここに一種の論理の詐術がある(略)即ち、たとえ玉の井という特殊地域を舞台にしながらも、世間とお雪とは人間性を媒介として「一縷の糸」でつながれているのに対し、玉の井に入りこむのに変身が必要とする「わたくし」は玉の井ともまたその住人であるお雪とも断絶しているという冷厳たる事実である。」
- (24) 松田良一、前掲論文。
- (25) すみ子が実際には種田の退職金を使わずに、「手金」でおでん屋の権利を買おうとしていることは見逃せない。また確かにおでん屋の経営は、以前から計画していたものであるとも述べられている。しかし種田と情交を結んだ後で計画を実行に移そうとする彼女の言動に、「男の力」を当てにした振舞いという側面があることも否定しがたい。
- (26) 平野謙、前掲論文。

SUMMARY

A Study of Nagai Kafū's *Bokutōkidan*:
Reading Logical Inconsistencies in Ōe's *Bokutōkidan*

Basir ABRAR

This paper mainly focuses on the narrative complexities of *Bokutōkidan* by Nagai Kafū (1879–1959). This well-known novel, serialized in 1937, is narrated in first person by Ōe Tadasu, the main character. Ōe mentions himself as the author of *Bokutohkidan*, which produces a multi-layered metafictional narration.

In the novel, Ōe recalls his first meeting with Oyuki, and their eventual parting. Ōe initially meets Oyuki while wandering the Tamanoi area in Tokyo. Their relationship soon becomes intimate; but in order to prevent possible misunderstandings, Ōe decides to hide his true identity as a famous author. One night, Oyuki asks Ōe to marry her. Ōe, utilizes this proposal to further develop the story in his ongoing novel, *Shissō*. However, he later emphasizes that Oyuki's request is simply a wish to change her life by relying on his wealth. He depicts himself as wishing to confess his true identity to Oyuki and explaining to her why he cannot accept her request. However, he fails to do so and gradually walks away from Oyuki's life.

Upon close examination, there seems to remain a distinct set of logical flaws in Ōe's narration. For instance, although Ōe claims that Oyuki is in harmony with her environment, it coincidentally provides him justification for severing ties with Oyuki. Similarly, Ōe persistently regards Oyuki as a member of a collective group of sex industry workers instead of as an individual. This is beneficial for him to articulate a logical framework — however flawed it may be — upon which he could rationalize his ideological viewpoints.

This paper shows a new reading of *Bokutōkidani* by analyzing the logical flaws in Ōe's narration. It argues that the unique role of Japan's world of geisha and other sex workers, or *karyūkai*, is crucial for Ōe to be able to rationalize and justify his ideological views on life, society, and justice by creating and utilizing a specific narrative.